経済論叢（京都大学）第 197 巻第 2 号，2023 年 12 月　https://doi.org/10.57475/keizaironso.197.2.1

巻頭言

特集号にあたって

京都大学経済学会は，経済学研究科との共催で，2023 年 5 月 27 日，以下のような高田保馬記念講演会を行った．

2023 年 5 月 27 日土曜日　午後 1–5 時
三井住友銀行記念講義室　法経三番教室

講演会： 吉野浩司「高田保馬の学問と故郷三日月村」
牧野邦昭「高田保馬の社会学と経済学」
野原慎司「日本経済学史における高田保馬」
質疑応答
司会：根井雅弘

当日は，高田保馬顕彰会の代表もお招きし，昨年没後 50 年を迎えた高田保馬の生涯と学問について，三名の気鋭の研究者の講演の後，活発な質疑応答を行った．

高田保馬（1883–1972）の経歴については，高田保馬博士顕彰会のホームページに詳しいので，それを参照していただきたい [1]．

高田は，京都帝国大学時代（1930–44），経済原論，経済学史，経済哲学などを講じた．しかし，当初は京都帝大で社会学を学び，のちに経済学に進んだことの意味が大きい．東京商科大学（現一橋大学），九州帝国大学でも経済学や社会学を講じている．九州帝大には栗村雄吉（基本的にワルラシアンの立場）という後継者がいたが，数年間しか在籍しなかった東京商大には弟子は育たなかった．後に東京商大で大物になる中山伊知郎が，シュンペーターの一作目の原書（『理論経済学の本質と主要内容』1908 年，稀覯本）を高田が図書館から借りっぱなしで困ったという回想を残している．

講演では，まず，吉野浩司氏が高田保馬の生家をドローンで撮影した映像から始まり，高田の生涯を詳しく辿りながら，高田社会学の基本概念（「群居の欲望」「力への欲望」など）を丁寧に解説された [2]．

昨年，牧野邦昭氏と共同で編集した『高田保馬自伝「私の追憶」』（佐賀新聞社）の解説では，高田が農村で暮らしたことが高田社会学のもう一つの基本概念「群居の欲望」の発見につながった（利益や利害などの目的のない共同社会を生むための根拠）と主張しておられたが，高田の故郷三日月村への想いが伝わってくる講演の内容であった．

続いて，牧野邦昭氏は，高田の社会学と経済学の関係について説得力のある解釈を提示された．特に，勢力経済学を第三史観（人口史観）の一部として位置づけ [3]，多少の誤解を招いた戦時中の時論（民族論や人口論など）も積極的に取り上げ，高田の思想の整合性について興味深い解釈を示

された.

最後に野原慎司氏は，経済体系が自律的であるという前提を批判する高田の立場と現代の「制度の経済学」との類似性を指摘した上で，高田の思想がそれを乗り越える可能性を持っていることを強調された．最近，『人口の経済学』（講談社選書メチエ　2022 年）という興味深い本を書かれただけに，高田の第三史観（人口史観）の再評価も含むものであった.

よく知られているように，晩年の森嶋通夫は，高田の「経済学と社会学の相互交渉」というべき構想を，パレートやシュンペーターのそれらとともに高く評価した（『思想としての近代経済学』岩波新書，1994 年）.

なお，以前，京都大学経済学会で講演された富永健一氏の講演録は，かなり広範囲の問題を扱っていて参考になるので，未読の方にはおすすめする.

富永健一「〈講演〉高田保馬先生の勢力説経済学と今日の経済社会学」（『経済論叢』180（5–6），2007）

この特別記念号には，お三方の当日の講演の内容をほとんどそのまま反映した論文が収録されている．関係者のご協力を記して感謝したい.

（文責：経済学会　前主任　根井雅弘）

注

1 http://takadayasuma.jp/oitachi/index.html

2 吉野浩司「高田保馬の家郷肥前三日月ー草花の匂う社会学の誕生」『地域総研紀要』（19–1,2021）参照．講演とは直接の関係はないが，吉野氏の高田論は，他にも次のようなものがある.

「高田保馬と労働者の勢力」（『一橋論叢』133（2），2005）

「豊かな社会の貧乏論ー高田保馬と河上肇」（『一橋研究』第 30 巻第 3 号，2005 年）

「研究ノート～武力闘争は経済闘争に変えうるかー高田保馬と近代日本の戦争」（『一橋論叢』第 135 巻第 2 号，2006 年）

「昭和初期の東アジア共同体の構想ー高田保馬の非対照性の民族論」（『ソシオロジ』50–3，2006）

3 牧野邦昭「高田保馬の価格論と勢力説」『経済論叢』（176–4，2005）参照．なお，高田の理論面の紹介としては，根岸隆「高田保馬博士と勢力説」（『日本学士院紀要』65–1，2010）がわかりやすい.